

短編映画 制作の実際

Production of Short Films

昼間 行雄

Yukio Hiruma

要旨

この作品ノートは、短編劇映画『逢魔が時に乙姫は囁く』（2017）の制作で、主に演出面に関する研究について記載したものである。

『逢魔が時に乙姫は囁く』を制作した目的は、映像クリエイションコースの実習授業「映像クリエイションIB」での短編劇映画制作課題の演出研究の参考作品とするためである。

制作に当たっては、コースの4年生有志、教員、副手が協力してスタッフとキャストを務めた。またロケ場所も施設部に撮影許可をいただき、学内のいろいろな場所を使用した。

●キーワード：映画制作（film production）／映画演出（direction）／映画撮影（cinematography）

実習とリンクしたドラマ制作の経緯

造形学部デザイン・造形学科の映像クリエイションコースでは、「映像クリエイションIB」（3年次）での短編劇映画制作を必修課題として平成27年度から行なっている。7～8人のグループで、スタッフとキャストに分かれ、企画から撮影、編集、仕上げまでを行ない、5分～10分程度の映画を制作する。主な撮影場所が大学内なので、学生には現実的な内容と非現実的な内容の2つの劇映画を考えさせることにしている。

現実的な内容とは、大学を舞台にした大学生が主人公の劇映画であり、誇張やギャグなどを除外した等身大のストーリー作りが求められる。

非現実的な内容とは、大学内で撮影はするが、そこを大学ではない別の場所として設定して、出演者も大学生ではない設定とするSFやコメディタッチのストーリーである。

なお本年度は、この課題を個人制作とし、夏季休暇中に撮影を行なうという内容に変えた。グループ制作の場合には、誰もが監督を務められる訳ではないので、演出面の考察に関して全員が取り組むには、個人制作が適していると考えたからである。

本コースでの劇映画制作課題で重要視しているのが「リアリティを考えた世界観を構築すること」である。以下に授業で示しているリアリティに関するレジュメの

一部を示す。

リアリティとは何か

リアル（real）とリアリティ（reality）の違い。

リアリティとは、リアルではない。

「もっともらしい……だけど、嘘」または「嘘……だけど、もっともらしい」ということ。

映画のリアリティ

劇映画は、リアリティの基準を設定すること、そのリアリティの基準を守ることで作品の世界が成立する。成立している世界は、設定されたリアリティの基準で、登場人物の行動や物語が作られる。その指標が「リアリティ・レベル」であり、リアリティの基準を常に考察して場所や登場人物、衣装、小道具等を決めていかなければならない。（参考書籍：『映画の授業』2004/黒沢清、塩田明彦ほか／青土社、『サルでも描けるまんが教室』1989/相原コージ、竹熊健太郎／小学館）

学生たちのストーリー作りにおいて、現実的な内容に関しては、各自の経験や周りの観察などを通して、かなり実生活に沿った内容を考えることができる。一方、非現実的な内容に関しては、学校内をどこに見立てて、登場

人物を何者として設定すれば、劇映画の世界観を構築できるかに皆が苦労する。いわば、現実の建物や登場人物を架空のリアリティ・レベルに照らし合せて設定し、造形していくことに不慣れなのである。

授業では「映像クリエイション IB」の実習課題より前に、必修授業「映像演技・演出論」で世界観の設定に関する講義を行っており、その研究を実習で活用するように指導している。しかし企画や演出経験がない学生の場合、リアリティ・レベルを決めることからストーリーを考えることまで、撮影前の工程をどのように具体的に進めて行けばいいのかがつかめずに立ち止まってしまうことが多かった。

この場合の指導としては、既存のストーリーを翻案する方法を考えること、キャストを学生だけに限定せず、年配の設定や子どもの設定であれば、その年齢に近い出演者をキャストとして探すことを促した。

今回、私が制作した短編劇映画も、ほとんどの撮影場所を大学内にし、大学内の建物や場所を何に見立てるか、既存のストーリーをどのように翻案するか、出演者をどうキャスティングするかを明確に意識して制作を行った。さらに、その制作過程をポートフォリオ化して、授業で参考となる教材として役立つようにした。

ストーリーの翻案

授業では、ストーリー作りの練習として、全くのオリジナルなストーリーを自由に考えさせるのではなく、既存のストーリーを基にして、新しいストーリーを作る方法を採用している。これはそれぞれが同じストーリーをベースにしている、できあがった新しいストーリーの世界観は全く異なっているということを比較できるというメリットがある。

例えば、時代や職業を変えるだけで、同じストーリーの骨格を生かして3通りの新たなストーリーができあがる。優れた脚本家は、多くの映画や小説、落語などに精通しているが、様々な設定を考えるのは、多くの知識を元にした翻案的な作業の繰り返しとも言える。

以下に授業で示している例を記載する。

アクション映画

刑事が、反乱を起こした犯罪者を追ひ、組織を突きとめる。

↓

刑事は、その組織を追ううちに、組織の一人の女を愛し、

苦悩する。

↓

組織は警察によって潰されるが、刑事は女を連れて国外へ逃亡する。

これをSF映画にすると……

人間そっくりのアンドロイドを専門に取り締まる組織の隊員が、反乱を起こしたアンドロイドを追ひ、アンドロイドたちのアジトを突きとめる。

↓

隊員はアンドロイドの一人の女を愛し、苦悩する。

↓

隊員は反乱を起こしたアンドロイドを殺すが、女を連れて国外へ逃亡する。

これを時代劇にすると……

賞金稼ぎのために一人の浪人がヤクザの親分に雇われ、組から逃亡した数人の裏切り者たちを追う。

↓

浪人は裏切り者の中の一人の女を愛し、裏切り者たちを逃がす。

↓

浪人は親分に狙われることになるが、その組のヤクザたちを壊滅させて逃亡する。村の外れで女は浪人を待っている。(参考書籍：『脚本通りにはいかない!』2002/ 君塚良一 / キネマ旬報社)

浦島太郎を翻案する

授業では昔話の「浦島太郎」を基にしたストーリー作りを行う練習課題を行なっている。この物語は、脚本作りの基本である三幕構成にぴったりと当てはまり、登場人物の数も少なく、その役割が明確なので翻案がしやすいことから選択した。

「浦島太郎」の構成を以下に示す。

登場人物

A : 主人公 (浦島)、B (乙姫)、C (亀)、D (子ども)、E (村人)

第一幕 = 発端 (状況設定)

場所 (1)

A が C と出会う

D が C を窮地に陥れている

AがDからCを助ける（CがAを誘う理由ができる）

第二幕＝中盤（葛藤）

場所（2）

AはCに再会する

CはAを場所（2）に連れていく

AがBと出会う

AはBを気に入る

BはAを気に入る

場所（2）

Aは場所（1）に戻る事ができない（留まる）

BがAを帰さない

or Aが自ら留まっている

or 何かを解決しないとAは戻ることができない

なにかのきっかけで、Aは場所（1）に戻ることになる

戻ることができる変化が起きる

or 戻ることができるようAが変化を起こす

or Aを戻すかわりにBはAに何かをする

第三幕＝結末（解決）

場所（1）

Aは場所（1）に戻ってくる

場所（1）が変化している

Eが場所（1）の変化をAに伝える

そのことで、Aに変化が起こる

『逢魔が時に乙姫は囁く』の構成

今回制作した短編劇映画『逢魔が時に乙姫は囁く』は、上記の「浦島太郎」の構成を元にして翻案し、構成した。

登場人物

A：浦島ゆか（主人公、高校3年生）＝（浦島）、B：竜宮寺（美術教師、幽霊）＝（乙姫）、C：亀田（ゆかの友人、写真と声のみ）＝（亀）、E：医師＝（村人）

D（子ども）は、人物ではなく小道具のスマートフォンに置き換えた。

発端（第一幕）状況設定

浦島が登校中、亀田から助けを求める電話。

浦島、急いで学校へ。

探しても亀田はいない。

プロットポイント＝亀田から「旧校舎の写真部の部屋にいる」と電話が。

中盤（第二幕）葛藤

写真部の部屋に飛び込むと、そこには見知らぬ女がいる。足音もなくゆかに近づいてきたその顔は蠟人形のように冷たく無表情。女は1年担当の美術教師の竜宮寺で、亀田はそこにいと告げる。そこは額のの中の写真だった。ゆかは、亀田がもうこの世にはいないことを察知するとともに竜宮寺を異界の者と気付いた瞬間、意識が途切れる。

時間がどんどん経過して夕方へ。起きる浦島。寝てしまったらしい。女は二人で撮影した写真を見せる。地震が来る予感。霊界にゆかを誘い込めなかった女は消える。

プロットポイント＝地震が起こり、校舎が倒壊する。地震で、浦島は現実に戻される。

結末（第三幕）解決

軽症で助かった浦島は、女と撮影した写真を持っていた。それを医師に見せるが、医師は浦島の体験を信じようとはしない。

浦島の手から写真が消える（霊の想いも消える）。

浦島は旧校舎での不思議な体験を忘れないでおこうと空を見上げる（祈り）。

プロットポイントとは、ストーリーを進めるための役割をはたすもので、事件、行動、心理状態の変化などで表現する。

『逢魔が時に乙姫は囁く』の脚本

以下に、この映画の脚本を掲載する。実際の撮影では変わった部分がある。高校が存在する場所としての静岡の設定を東京に変更したこと、玉手箱を翻案した小道具として花束を設定し、それが霊界へ行った人の印となることなどである。後述するが、最後のシーンは、演技を大きく変更した。

短編映画「逢魔が時に乙姫は囁く」(決定稿)

【あらすじ】

高校生の浦島ゆかは、いじめられている友人からの助けを求める連絡を受け、旧校舎の写真部部室に急ぐと、そこには見知らぬ教師の竜宮寺が。竜宮寺はツーショットの写真を撮ってゆかに見せる。

竜宮寺は、ゆかに写真が入った封筒を渡そうとしたとき、緊急地震速報が流れ、ゆかは気を失い、地震で校舎は倒壊する。

病院からの帰り道、ゆかは、竜宮寺から渡された写真を見る。部室しか写っていない写真に竜宮寺が現れ、手招きをする。「こちらの世界へいらっしゃい」と…。

【登場人物】

浦島ゆか(高校3年生)

竜宮寺(美術教師、幽霊)

亀田(ゆかの友人 写真と声のみ)

担任の先生

医師

アナウンサー(声のみ)

1 夕方の風景

富士山が見える街。ゆか(高校3年生)が走ってくる。鈴の音。

字幕「学校には、多くの人たちの忘れられない思い出が堆積している。喜びも、悲しみも、そして恨みも…」

走るゆか。

字幕「この校舎ができたばかりの頃、クラブ活動の写真撮影中、階段から落ちて一人の美術教師が亡くなった。」

走るゆか。

字幕「彼女は、自分ではまだ生きていて、この学校に毎日通っているつもりなのか、校舎の中にその教師の姿



映画のメインタイトル

を見たと言う生徒は、少なくない…」

走るゆか。

2 高校(朝)

高校外観。走り込んでくるゆか。カメラ空にテイルト。

タイトル「逢魔が時に乙姫は囁く」

3 校舎の前

小走りに歩いてくる生徒、浦島ゆか。

先生「あ、(OFFで)浦島さん」

ゆか、その声に振り向く。

先生「今日は早いのね」

ゆか、てきとうにうなずいて小走り気味で応える。

4 校舎の裏手

ゆか、走り込んでくる。

誰もいない。

と、LINE着信(バイブ)が響く。

スマホを手にとってボタンを押し、耳に当てるゆか。

5 校舎内

小走りに急ぐゆか。

6 廊下

ゆか、歩く。前のシーンでの会話がOFFで。

亀田「ゆか? 助けて。鬼沢たちが」

ゆか「また、いじめ? うん、いまどこ?」

亀田「写真部の部室」

ゆか「…」

亀田「旧校舎の3階、視聴覚室の中…」

7 写真部部室前

ドアの前で立ち止まり、ゆっくり息を吸ってドアノブに手を掛ける。

思いつき、ドアを開けて中に入るゆか。

8 部室

機材が積んである棚の手前に、人(竜宮寺)がひとり。振り向く。

ゆか「あ、あの…」

竜宮寺、振り向く。

ゆか「え? あ、あのう」

竜宮寺「浦島さんね、待ってたわ」

ゆか「え？」
竜宮寺「私は、ここの顧問の竜宮寺です、はじめまして」
ゆか「え…？」
竜宮寺「3年生の人たちはほとんど知らないでしょうね。
私は1年生の美術の授業だけだから」
ゆか「あのう……」
竜宮寺「亀田さんね。亀田さんはもう大丈夫。あそこにいるでしょう」
ゆか「え？」
竜宮寺が指差した方向に亀田が花束を持って笑顔の写真が額にかざってある。
ゆか「え？」
竜宮寺「そう、亀田さんは、永遠に微笑み続けるのよ、ほほほ」
ゆか、後ずさりして、ドアを開けようとするが開かない。
竜宮寺「ゆっくりしていきなさい、浦島さん」
影から顔を出した竜宮寺、微笑。

× × ×

ふと、気が付くゆか。龍宮寺、カメラを片付けながら
竜宮寺「あれえ、浦島さん、起きたの？」
ゆか、状況がつかめずにいる。ゆかの前に花束が置いてある。
竜宮寺「疲れているのかしら？ 寝てしまったのよ」
ゆか「あ、あのう、失礼します」
竜宮寺「お花、プレゼントよ」
花からオーバーラップして写真が出てくる。
部室の中でゆかと竜宮寺が並んで写っている写真。
ゆか「え、いつ？」
竜宮寺「あら、何寝ぼけているの？」
竜宮寺は微笑して写真をゆかに渡す。
ゆか、受け取る。
と、警報音が響く。ゆか、スマホを取り出す。スマホの画面は緊急地震警報。
部屋のスピーカーが鳴る。
スピーカー「ただいま、緊急地震速報が流れました。震源は東海沖。大きな揺れが予想されます。くりかえします…」
ゴゴゴという地響きで揺れる部屋。
と、ゆか、バタッとしゃがみこむ。竜宮寺の姿はない。
上から落ちてくる物や箱。

9 校舎外観

地響きとともに崩れ落ちる校舎。ばらばらと落ちていく

机や椅子。

10 テレビ

ニュース「今回、東海地方を襲った地震は、最大震度6。2011年の東北大震災よりも大きい震度でしたが、被害は少なく、現在までに死者203名、重軽傷者4200名…」避難の様子などの映像。

ニュース「東海市の市立昔野高校では、使っていなかった旧校舎が崩れ落ちました。中には3年生の生徒が取り残されていましたが、無事救出され、病院で手当を受けています。」

崩れた校舎の映像。

11 病院

総合病院の外観。夕方。

12 診察室

医師の診察を受けているゆか。

医師「もう心配ないでしょう。でも崩れた校舎の中でかすり傷というのは奇跡ね」

ゆか、無言でうつむいている。

医師「でも、なんで使っていない旧校舎に入ったの？」

ゆか「竜宮寺先生が…」

ゆか、何かに気がついたように手提げから封筒を取り出す。

ゆか「これ、その時に撮ったんです。この人が竜宮寺先生」

ゆか、封筒から写真を取り出す。が、驚愕するゆか。

ゆか「あれ？」

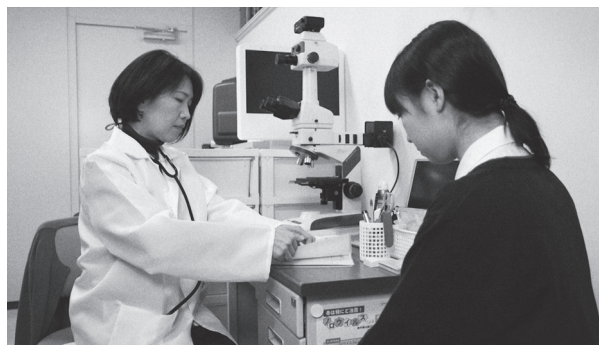
写真は部屋だけで、竜宮寺は写っていない。

医師「一時的な記憶の混乱ということもあるから」

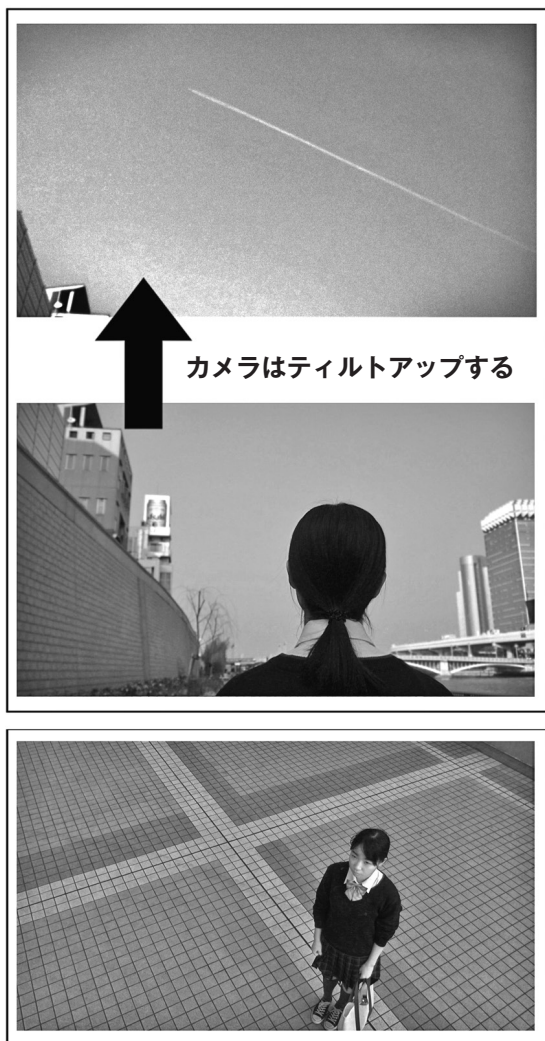
医師、写真を覗き込んで微笑む。

医師「次は2階の心療内科で診察を受けて下さい」

医師、書類をゆかに渡す。写真を返し忘れ、ゆか、あわてて受取り、手提げへ。



シーン 12 診察室



シーン 13 祈りと浄化の編集

13 病院の玄関前の広場

あたりが夕闇に包まれ始めている。
 ゆか、ふと立ち止まり、手提げの中から、竜宮寺に渡された写真を取り出す。
 写真を見つめるゆか。
 ゆか「でも…」
 部屋だけが写っている写真。
 ゆか、なぜか、ほっとする。と写真に、竜宮寺とゆかの姿がオーバーラップ。
 驚くゆか。写真を放り投げる。
 写真が空に舞い上がって飛んでいく。
 竜宮寺の声「こちらの世界に来ればよかったのに…」
 空を見上げるゆかのアップ。
 クレジットタイトル。
 エンドタイトル。

撮影での変更点

劇映画では脚本を元に監督がカット割をする。事前に絵コンテを描いておく事が多いが、撮影現場で実際に俳優の演技を見ながらカットを割っていく事も行なう。

映像では文字で書かれた状況を具体的に画面として表さなければならない。さらに映像で表す事により、説明のセリフや説明的な画面構成をしなくても済む場合があるので、単に脚本をそのままそっくり画面に起こすわけではない。

編集では、1カットずつをつなげていくことでシーンを作り上げていく。監督は、この作業を撮影現場で撮る前に頭の中で行なう。これがカット割である。だから脚本を読んで具体的な画面をイメージして、仮想に編集ができればならない。

例えば自分で書いた脚本であっても監督の立場で読んでいくことが肝心だ。例えば本作品の脚本であれば、シーン 11 の病院はどんな外観なら観客が総合病院として理解できるのか。夕方という時刻は具体的には何時で、それを観客に示すにはどうするのか。シーン 12 の診察室は何科なのか、それをどのように示すのか、診察をしている医師はどのような容姿なのか、などなど全てを具体的にしていかなければならないのである。

撮影に際しては、大きく脚本を変えて、撮り直したシーンがある。それはシーン 13 の後半、教室しか写っていない写真に幽霊である竜宮寺の姿が浮かび上がり、ゆかは驚いてその写真を放り投げるというアクションの部分である。放り投げられた写真は生きているように空に舞い上がって消えるのだが、この場合には、この写真を幽霊が操っている、すなわちこの時点まで、主人公ゆかに対して幽霊である竜宮寺は、ゆかを取返すことを諦めていないという解釈になる。当初、このようにしたのは、原作の「浦島太郎」での玉手箱を本作では写真に置き換えていたためである。原作では、煙が立ち上って太郎がお爺さんになってしまう見せ場であるが、これを現実の中で写真を使ってどう翻案するか。ゆかに未練がある幽霊が追いかけてきて、驚いてその写真を放り投げるというアクション・シーンとなったわけだが、問題となったのは、このシーンのゆかの心情で、そのようなアクションが生じるのかという点である。

幽霊の竜宮寺からゆかが解放されるきっかけは地震である。ゆかは現実でその被害を被るが、生命は助かることによって、ゆかの心情は、すでにその崩れた校舎で過去に死んだ竜宮寺から解放されているとともに、竜宮寺

に対する恐れは、祈りに変わっていなければならないのではないか。であるならば、写真に現れる竜宮寺の姿は、ゆかの主観であり、静かに写真が消えていくだけで、竜宮寺が浄化されていったという表現になるだろう。

このような考えで、何カットかを撮り直した。撮影時には、ゆかが見上げる青空に偶然、一筋の飛行機雲が横切り、ゆか越しの雲を捉えることができて、より竜宮寺の浄化を映像的に表すことができた。さらにその後のカットは、地面に敷き詰められたタイルの模様がちょうど十字架に見える位置にゆかを立たせて撮った俯瞰のカットなので、祈りと浄化の編集ともなった。

ラストカットで遠くをみつめるゆかのアップは、ストップモーションで静止させた。これは、命に対するゆかの想いが観客の印象に残るような演出である。

おわりに

この劇映画を今年度の授業では教材として使い、企画から制作までのポートフォリオを示し、その後に作品を上映、そしてメイキングシーンを見せながらの解説を行った。

参考作品として著名な劇映画を見せるのは必要だが、それだけでなく、学生たちが制作する作品とほぼ同じ規模で作られた短編を見せることも必要である。この映

画は、これから学生たちが撮影する場所そのもので撮られていることが、興味を引く要因になり、学生たちの制作意欲が向上した。

学生の制作に際しては、ストーリーやキャラクターの企画、プロット作りなどの段階に多くの授業時間を割り当てた。昨年度に比較すると、世界観の構築やキャラクター造形に関しての向上が確実に見られ、作品の完成度も高まった。

本作品の制作では、出演者の俳優、三島美和子さん他、多くの教員、副手、学生の方々の協力が得られたことで、スムーズに撮影が進行し、映画を完成することができた。深く御礼を申し述べるとともに、より理解しやすい教材となるような作品制作を今後も続けていくことができれば幸いである。

作品データ『逢魔が時に乙姫は囁く』

(2017/ ハイビジョンデータ /BD/11 分)

出演：佐藤結香、三島美和子、中村朝香、大沼由樹、荒井知恵

監督・脚本・撮影・録音・編集：昼間行雄

撮影・録音助手：徳山菜々美、大沼由樹、中村朝香、工藤杏美

音楽：Cinematic Music (2008 Sound Ideas)